

東京帝大
医学部総理

池田謙齋伝

長谷川つとむ

〈著者略歴〉

長谷川つとむ (はせがわ・つとむ)

東京に生まれる。西独政府給費フンボルト留学試験合格、キール大学にてゲーテ研究の権威エーリヒ・トルンツ教授のもとでファウストを研究。1969年、日本ゲーテ協会長賞授賞。1984年、日本文芸大賞・ノンフィクション賞受賞。現在日本大学教授、日本ペンクラブ会員、日本旅行作家協会会員、日本独学史学会会長。

本名、長谷川 勉 別号、会津田人。

著書・訳書：『ファウストの比較文学的研究序説』（東洋出版）、『魔術師ファウストの転生』（東京書籍）、『蹠子、留学は終わったよ』（三修社）、『現代文学とみちのく』『現代文学と北海道』『現代文学と北陸』『現代文学と九州(上)』『現代文学と九州(下)沖縄』『処世戦略の勝者・伊達政宗の生涯』『信玄の経営戦略』（高文堂出版社）ほか多数。

東京帝大医学部総理 池田謙斎伝

一九八九年十二月二十日 第一刷発行

著 者 長谷川つとむ

発行者 菅 英 志

発行所 新人物往来社

東京都千代田区丸の内三十三一（新東京ビルディング）〒一〇〇
電話（二二二）三九三一（代表） 振替東京六一五―六四三

印刷所 三晃印刷

製本所 小泉製本

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。



(定価はカバー・帯に表示してあります) Printed in Japan

ISBN4-404-01691-3 C0023

東京帝大医学部総理

池田謙斎伝

目 次

卷一 ビワの木刀 9

卷二 攘夷少年 25

卷三 大転換 44

卷四 長崎 58

卷五 無明 79

卷六 新生 96

卷七 大海原 112

巻八 蒸気車、東へ走る……………129

巻九 櫓の扉……………148

巻十 女も人壹人……………161

巻十一 失われた脚……………168

巻十二 マグナ・クム・ラウデ……………177

巻十三 昇龍……………209

あとがき……………252

東京帝大医学部総理

池田謙斎伝

卷一 ビワの木刀

好奇の目というものには、達吉は若い頃から慣れていた。

宮内省侍医局長官・池田謙斎の甥として医学部の学生であった時も、卒業後ただちにエルヴィン・ベルツの助手になった時も、そしてベルツの後任として教授に就任した時も、冷たい眼、温かい目差し、皮肉な視線、期待の注視など、さまざまな目の中にあった。

気張ってみせるのは野暮だという、いつの頃からか身につけた処世術で、意地の悪い数々の視線をかわし、不退転の決意と不断の努力で好意的な声援に応えてきた。

日本内科学会会頭となり、誰にも指弾されそうにない立場になっても、達吉の気さくで謙虚な生活姿勢は変わらなかった。

学生にも医局員にも患者にも敬愛され、順風満帆の人生を送っている快活で精力的な、この帝大医学部教授の心の中が実は、常に焦燥にかられていたとは誰が知ろう。

「ぼくのところは、短命の家系でね。だからあわてて仕事をするのさ」

達吉は、その精力的な仕事ぶりを讃められると冗談めかしてそう答えるのだが、この台詞は本心そのものであった。明治七年、父・恭平は脳溢血で他界したが、生まれつきの高血圧症である達吉は、もうとうに父の没年の四十三歳を上回る年齢とくしになっていた。

彼は、死を恐れているのではなく、常に死を念頭に置いて仕事をしていた。といっても彼の焦りは専門の医学のことではない。

自分が、どのように努力し、優秀な医局員がどんなに熱心にそれを支えてくれても、医学だけが突出して進歩するものではない。他の自然科学の進展や、それを受容する社会も良くなければと思っている。

「医学を前進させるには、絶えず勉強しなけりやならんのはもちろんだが、気長に辛抱強く待たにやあならんのか」

と口癖のように言う達吉は、こと医学研究そのものに關する限り、焦ってはいなかった。彼の焦燥の根源は、医学の仕事は、それがどのように優れていようと、必ず次の世代に乗り越えられ、とつて代われ、泡沫のように消えていく運命にあるもの、また当然そうでなければならぬものということにあった。

その点、彼は後世に残る詩や文を作る人々がうらやましかった。それにしても自分より三歳年長の鷗外の仕事ぶりはどうだ。達吉が医局に入りたての明治二十三年、『舞姫』や『うたかたの記』を著した若い軍医の名前と写真を憧憬の念をもって眺めたが、このところの『阿部一族』『佐藤甚五郎』『大塩平八郎』『山椒太夫』『魚玄機』『高瀬舟』『寒山拾得』など矢継ぎ早の歴史小説の発表には完全に圧倒された。医者としての研究や臨床の腕は自分のほうが上だろう、などと思うケチな根性は、達吉にはケシの粒

ほどもなかった。彼はかつて『時事通信』や『中央医事週報』に掲載された自分の雑文が兎戯に等しいものと感ぜられ恥しかった。

「あんなものを、いくら書いても歴史の波が消してしまおう」、そう達吉は、独語した。彼は作家や詩人や歌人が、うらやましくもあり妬ましくもあった。達吉は、その憂さを、明治三十三年ベルリンで厳谷小波を中心にして誕生した白人会という句会に参加することによって晴らそうとした。

水墨画と書と芝居見物の趣味に加えて、紅葉館で催される句会が彼の楽しみになった。達吉は俳号を雲人と名乗った。

「先生は、よほど雲が好きなのですね」と、弟子の平野啓司が言うと、

「なに君、雲人はドイツ語の『Unsin^{ウンジン}』——無意味なこと——の意——」から来たんだよ」と達吉は茶目っぽく答えるのであった。

ところで達吉の白人会入りは、彼の俳号の駄洒落が示すような無意味なことではなかったが、彼の諧謔の精神が川柳や狂歌的なものになってしまふのだ。

そうした軽みが句会で指摘されるならまだしも、主催者の小波山人が大の諧謔家であり、達吉の大学教授らしからぬ気どりのなさが、ここでももてはやされた。彼は居心地の良さを感じつつも、俳句を始めた本来の目的とは、掛け離れていくことに、またもや人には言えぬ苛立ちを感じ始めた。

達吉が、後年創立した科学ペンクラブで出している機関誌『科学ペン』第四巻第二号に前述の弟子の平野啓司が、師の作品を若干披露している。

古里や 昔ながらの 柿の秋

かへりなん いざ五畝の畠に 菊植ゑて

いずれも大正八年秋、白人会創立二十周年記念句会で達吉が発表したものであるが、あまり韻文の才能があるものとは思えない。

粹人・入沢達吉の面目躍如たるものは、俳句よりも晩年病臥中の次の狂歌であろう。

タンニン酸オレキシンを眺めつゝ

きかずとは 思へどこれも 義理なれば

人に飲ませし 葉われのむ

話を大正六年に戻そう。

さまざまな試行錯誤の末に、彼は日本医学史の編纂を思い立った。それもいきなり歴史書を書くのではなく、個々の医師の伝記を記し、それがやがては層をなして、おのずから日本の医学の歴史を語ることになる事を狙った。これは鷗外の史伝・『渋江抽斎』がヒントになり、刺激にもなった。日本医学史学会などというものでも設立して皆で仕事をすればよいのだろうが、医学者の中にそうした者が、目下のところいない。それには、まず腕^かより始めよだ、と達吉は思い立った。

考えてみれば、自分は医学史の宝庫の中に生まれ育ったようなものだ。まず亡父の入沢恭平は、長崎でオランダ医官ボンペ・ファン・メーデルフォールトについて学んでいて、越後蘭学の鼻祖とまで言われた男である。たしか郷里にはその日記が残っているはずだ。それから大伯父の入沢所蔵・貞意・章純・玄庵、さらには短期間ではあったが祖父の健蔵まで『解体新書』の校訂者である大槻玄沢の門人だった。

もう一つの強みは、幼くして父を失った自分を親

代わりになって育ててくれた叔父・池田謙斎だ。謙斎は過激な攘夷少年から蘭方医に転向し、幕末から明治にかけての日本医学界の移りゆくさまを実体験し、その後官費留学生第一号としてドイツに学び、帰国後、初代の東京大学医学部総理（学部長）となつた第一級の医学史の証人なのだ。

われわれが先人や自分達の歩みを文字に刻み印刷に付し、それを集大成していけば、われわれの技術が、われわれの生命と共にこの地球上から消えることはあるまい。

思い立つと、じつとしていられないのが達吉の性分であつた。二日後の四月の第一日曜日、大森別邸に叔父謙斎を訪ねた。ここは、もと根津で芸者をしていた島村志津との生活を営むために謙斎が建てたものである。

達吉が、趣旨を説明すると、叔父は即座に賛成してくれた。

「では、来週から毎日曜お願いしてよろしゅうございますか？」

「いや、わしもお前も齡だからな、お互いいつ神か

仏か知らないが、お呼びが来るか分からん。善は急げだ。来週などと言わず、今日これから始めよう」謙斎の回顧談は、こうして即刻開始されたのであつた。

天保十二年（一八四一）十一月一日、越後蒲原郡西野の里正さとしょうつまり庄屋である入沢健蔵の家に、二番目の男の子が生まれた。後に幕府奥医師、池田玄仲の養子となり謙斎と名乗るにいたるこの赤ん坊は、圭助と名付けられた。

現在、西野は豊かな穀倉地帯だが、かつては近くを流れる信濃川がしばしば氾濫して田畑を水浸しにした。享保から明治にいたる約二百年の間に信濃川の破堤は百回以上に及んだ。さらに信濃川の泥砂が堆積して、河中に中洲ができたが、そこを耕作した者が、よくツツガムシ病に罹つた。このツツガムシ病に罹つたものは、謙斎の父ならびに祖父の時代が特に多かったと言われる。

その頃は、まだ病原体がわかつていた訳ではなく、
“中洲”つまり“島”を耕作すると罹るところから

島虫病と言われた。明治四十年に、この川の水を日本海に放流するという大治水工事が完成したのだが、その時はもうこの話の主人公は六十六歳に達している。

入沢家ならびに西野の人々の間では、同家が鎌倉幕府の執権北条氏の血筋を引くと伝えられている。

南朝暦でいうと元弘三年、北朝暦で正慶二年（一三三三）、幕府の滅亡に際して、一族の左馬助時俊が鎌倉を脱して信州に逃れ、同国の佐久郡入沢に住んで、入沢姓を名乗って以来の家系であるという。

佐久での平和は二百年続いたが、それを破壊したのが甲斐の武田信虎と、後に出家して信玄と号したその子晴信である。天文九年（一五四〇）、この父子の率いる八千の軍勢の侵入を皮切りに、佐久はしばしば甲州騎馬軍団の馬蹄に蹂躪された。そして同二十年（一五五一）、信濃源氏の流れを引く大豪族村上義清が武田軍に撃破されるに及んで、入沢一族も信濃の諸将と共に上杉謙信の庇護を求めて越後に逃れ、見渡す限り荒蕪地であった西野の地を開墾して住みついたのは、慶長九年（一六〇四）だと言わ

れている。

苗字帯刀を許された里正の家であっても、侍という言葉の響きは、また格別のものではあったらしい。その侍の血が自分の体内を流れているのだと思うた

びに、圭助は肌に粟粒ができるほど興奮した。

寺子屋に通うようになってからは、誰かに教えられた訳でもないのに、庭で棒切れの素振りや、早朝するようになった。

農道で、おとなしそうな子が悪童たちにいじめられていたのを見ると、圭助は手近に棒切れがあればそれをつかんで、無ければ素手で、相手の中に躍り込んでいくのだった。

悪童たちとしては、反撃すれば圭助など簡単にやつつけられるのだが、相手は土地の最高権力者里正の子である。

「入沢の坊ちゃ（越後方言で坊ちゃんの意）だ！」と言ってクモの子を散らすように逃げ去るのが常だった。

「敵に後ろを見せるとは卑怯なり。引きかえせ」と圭助は侍きどりで得意になって怒鳴った。圭助

は、いつの間にか西野における「いじめられっ子」の守護神的存在になっていった。

入沢家にはビワの木があった。圭助が満十二歳になった嘉永六年（一八五三）、その見事な枝の一本を健蔵は庭師に切らせ、自ら削って形を整え火であぶって縄でこすると紫色の見事な木刀となった。

寺子屋から帰ってきてこの木刀を渡された時、圭助は目を輝かせた。

「これは、お前の心と身体を鍛えるためにわしがつくったものだ。外に持ち出してはならん。まかり間違っても他人を叩いてはならない。打たれた人の骨は碎ける。本物の刀と思って真剣に扱え。わかったな。この約束が守れるなら、明日からは、わしがお前の相手をしてやろう。わしは、けして上手ではないが、型だけは若い頃習ったことがあってな」

健蔵は、翌朝から息子の相手をしてやった。もともと武器が武器だけに、打ち合うことはけしてなく、厳格な型の稽古であった。健蔵の手に握られていた木刀もビワの木で作られたものであった。作ってくれたのは、健蔵の父・所左衛門である。

所左衛門には、健蔵を含め五人の男の子がいたが、それぞれが十歳を過ぎると全員にビワの木刀を作って与えた。ビワの木刀はカシよりも危険であるということは今日でも耳にするが、所左衛門はそれを承知の上で与えたのである。

所左衛門は、木刀といえどもみだりに用いれば人に大怪我をさせたり、へたをすれば命を奪う危険性のあることを、まず第一に教えた。彼は、息子たちにそうした危険な道具を与えることによって緊張感と責任感を植えつけようとした。

彼は剣によって剣の無用を教えようとしていた。祖先が武士であることに誇りを持ちつつも、「刀」の時代は、やがては終わるだろうという予感を感じていた。

未来に対する先見性というものが特に優れていた訳ではないが、変化に対する一種の嗅覚を持っていた。彼は越後の一庄屋として小作人から絞り取ってきくのと同じきよう、きょうと同じあすを安閑と過ごせればよいと思うような怠惰な精神とは無縁な人物であった。

彼は、五人の子供のうち里正となるべき長男の所蔵を除き四人を江戸に送り、杉田玄白の弟子で当時の蘭学界の中心人物・大槻玄沢に入門させた。

文政十年（一八二七）二月、所左衛門が亡くなり長男・所蔵が入沢家当主となった。ところがその所蔵が父の後を追うように半月後急逝した。父子ともに脳出血が原因であった。

その頃、所左衛門の次男・貞蔵は貞意と改名し、すでに江戸麴町六丁目に蘭方医として開業していたし、後年出家して章純と名乗った三男章蔵は伊庭道場に入りしていた縁から医学から方向を転じて古河藩に仕官していた。そこで後年、玄庵と改名して鳥羽藩主・稲垣家の侍医となった五男の源蔵を江戸に残して、四男の健蔵が越後に帰った。

まだ若かった健蔵は、長崎でさらに勉強してみたかった。師からしばしば聞かされたオランダ国、師さえ行ったことのない文明国、堤防が簡単に決壊されないであろう花と風車に彩られた美しい国、さまざまな病が進歩した医療技術によって治癒されていく国、に夢を馳せながら、俗に「流れ所」と言われ

る水害常習の地、島虫病がしばしば発生する故郷に帰っていった。彼が故郷の土を踏んだ翌三月、師・大槻玄沢の訃報が届いた。日本の蘭学界というより知的世界の巨星が墜ちたのである。

敬愛する肉親と師を僅か二カ月のうちに三人も失った健蔵は、地獄に突き落とされる思いだった。

合理主義者だった健蔵が、毎日必ず西野の諏訪神社で手を合わせるようになった。この神社は、彼にとって神に対する祈願の場であると同時に、若くして亡くなった長兄・所蔵との対話の場でもあった。

諏訪神社はもともと信州諏訪地方の大きな社で、古代から信州諸豪族に崇敬されていた。その大祝つまり神官長だった諏訪頼重が、義兄の武田信玄の謀略によって天文十一年（一五四二）、甲府の東光寺で自害させられたのは有名な話である。

それはさておき、入沢家も二百年間信州に根を張っていただけに、他の信州の豪族たち同様、諏訪大社に対する崇敬の念が篤かったのである。西野に入ってから代々諏訪大明神を奉祀し続けた。父・所左衛門は文化八年（一八一）四月、所蔵を京都